

研究通信

No. 168

1992年5月15日 刊
村落社会研究 会
事務局 院大 学
関西学院 大之
鳥越皓
西宮市上ヶ原1番町1-155
Tel. 0798-53-6111
(内線5314)

一九九二年度 第一回研究会

日時 一九九二年二月二日

場所 中央大学駿河台記念館

出席者 杉原たまえ、松田苑子、長谷川昭彦、吉沢四郎、鳥越皓之

酒井俊二、宮崎俊行、北原淳、倉持和雄、高橋明善。

韓国農業構造の変容

倉持和雄 (横浜市立大学文学部)

はじめに

まず断っておかねばならないことは、この報告は主としてマクロ的な話しにならざるをえない。実は、昨年(九一年)夏韓国に行つて、韓国農村経済研究院というところの報告書を手にいれた。それは、一九八五年から二〇〇一年までの十五年間にわたって、四つの村落を選定し、そこで毎年調査をつづけるというプロジェクトの一

九八五〜一九八九年の報告書の一部である。この研究会の性格からして、もっとミクロの話しをすることができればよいと思ひ、年明けからその報告書を材料として準備を進めてきた。しかし、個別世帯のデータ(世帯の性格、世帯主の年齢・性別、家族数、所有農地規模、耕作農地規模)などをパソコンに入力するなど煩雑な作業をしたため、意外に時間を要し、結局予定したようにはいかなかった。すでに整理したデータは、レジュメとは別の資料としてお配りした(本稿では省略)。そんなわけで、この事例調査の話しは部分的に利用させてもらうことにして、本日の報告は、もうすこし大ざっぱなマクロ的な話しにならざるをえないことを了承していただきたい。さて日本と韓国の農業構造は、たいへん似ているといわれる。表面的なことであるが、第一に、両国とも農地改革を実施し、自作農主義のもとで、だいたい一戸当たり一ha程度の規模のいわゆる小農を中心とした農業であること。第二に、米作中心の農業であること。両国ともコメだけは自給し、他の作物は輸入に依存する、たとえば、飼料を輸入して施設型の畜産をおこなっている、ということなども非常に似ている。第三に、これは別に日本と韓国だけのことではないが、この間の工業化の過程で農業の国民経済にしろる相対的地位を低下させてきたこと。第四に、最近では両国がともにアメリカから農産物の市場開放圧力を受けていることなども似ている。しかし、もっと両国の農業構造に立ち入って比較するとやはり異なる点に行きあたる。この研究会では、まさにそのことをこれから課題にするわけである。わたしは、日本のことについて十分なことはいえないので、韓国のことに限ってお話しさせていただくのだが、つぎの二点の違いだけをいっておきたい。

第一に、離農・離村の程度が、韓国の場合より急速であるということである。日本も韓国も農家戸数、農家人口ともに減少を続けているが、韓国は日本のほぼ倍ぐらいのスピードで減少している。すなわち日本では農家戸数、農家人口ともにピークになるのは、一九五〇年頃であり、韓国では一九六七年のことである。以降両国ともほぼ一貫して農家戸数、農家人口が減少しているが、一九八七年に両国とも農家戸数は、ピーク時の約七割水準（日本六九・四％、韓国七二・八％）、農家人口はほぼ半分（日本五一・五％、韓国四五・二％）となった。ほぼ同じ水準に減少するのに、日本が約四〇年近くかかったのに、韓国はその半分の二〇年しかかかっていないということなのである。こうした急激な人口の減少が、韓国の農業構造に与えたインパクトは日本のそれより相当に大きいものといわざるをえないだろう。

第二に、韓国では兼業機会が少ないということである。このため兼業農家が日本にくらべるとたいへん少ない。たとえば、一九八七年日本の場合、専業十四・七％、I兼十四・八％、II兼七十・五％であるのに対して、韓国では専業七八・三％、I兼八・五％、II兼十三・二％である。これは第一に述べたことと関連するが、韓国では結局、農外就業のためには、離村せざるをえないことをものごとくしている。

さてこの報告では、この急速な農村人口の流出にともなって顕著になった農業労働不足の問題に韓国農村が、どう対応していったのか、を中心に話しを進めていきたい。

I 工業化と農村人口の都市流出

(1) 農村人口の流出推移とその特徴

第一図および第二図は、一九六〇～一九八九年間の農家人口および農家戸数の推移をしめたものである。さきほど話したように、農家人口も農家戸数も一九六七年をピークに、それ以降は一貫して減少傾向にある。一九六七年に一、六〇七万八、〇〇〇人および二五八万七、〇〇〇戸に達した農家人口と農家戸数が、一九八九年にはそれぞれ六七八万六、〇〇〇人および一七七万二、〇〇〇戸へと大幅な減少を記録している。この約二〇年間で人口は約六割、戸数は約三割がた減った勘定になる。

いま一九七〇～一九八五年について一九七〇～一九七五年、一九七五～一九八〇年、一九八〇～一九八五年、一九八五年～一九八九年にわけて農家人口および農家戸数の減少数と減少率を計算してみると第一表のようになる。農家人口、農家戸数とも七〇年代後半に減少速度が急増している。さらに八〇年代にはいると、減少数のうえでは七〇年代後半とは同規模だが、減少率の点ではさらに加速化しているということがわかる。

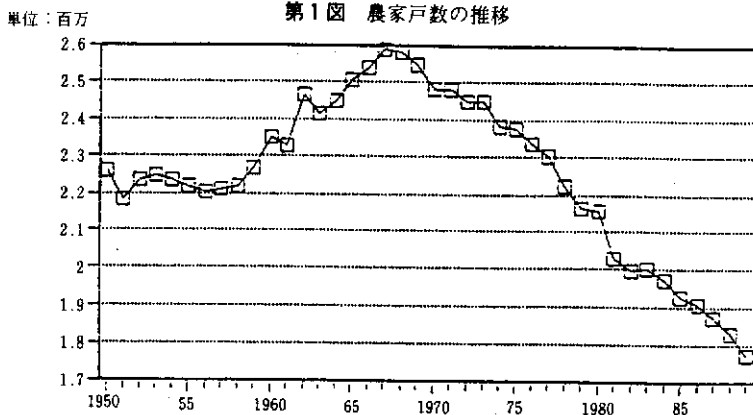
減少農家戸数で減少農家人口数を割ると、戸数当たり十・十一人といった数字になる。最近では一農家の家族数はしだいに減っており、平均的には、せいぜい四・五人といったところであるから、世帯流出による農家人口減は、一戸当たりで四・五人相当と考えて良いだらう。そうすると残る五・六人は単身流出による減ということができる。この限りでいうとこの間の農家人口減少数は、単身流出が若干多いが結構世帯流出も多いといえそうである。ただ韓国経済研究院の事例調査では、単身流出が圧倒的に多い。一九八五～一九

第1表 農家戸数と農家人口の減少数と減少率

	農家人口		農家戸数		(A)/(B)
	(A) 減少数(千人)	減少率(%)	(B) 減少数(千戸)	減少率(%)	
1970~1975	1,178	1.7	104	0.9	11.3
1975~1980	2,417	3.9	224	2.0	10.8
1980~1985	2,305	4.7	229	2.2	10.1
1985~1989	1,735	5.6	154	2.1	11.3

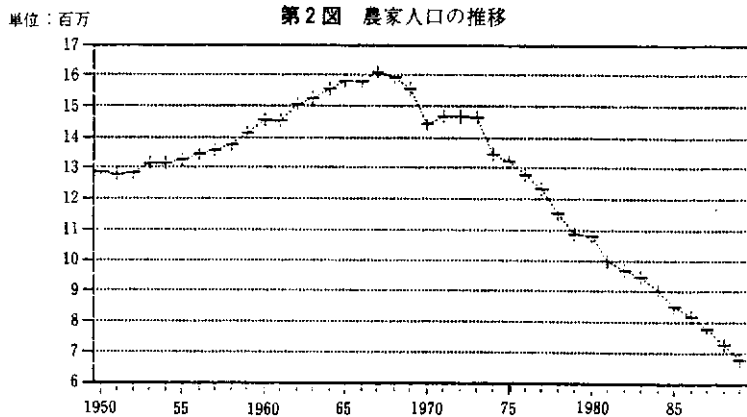
(出所) 農水産部『農林水産統計年報』各年版より算出。

第1図 農家戸数の推移



(出所) 農水産部『農林水産統計年報』各年版

第2図 農家人口の推移



(出所) 農水産部『農林水産統計年報』各年版

すなわちまず、六〇年代には、極貧の零細農を中心に文字通り挙家離村がみられたが、七〇年代以降、工業化が進んで都市での雇用機会が増大するにともなうて、若年層を主体とした単身流出が盛んにおこなわれるようになる。この単身流出はいまでも続いているが、その中心は一〇代、二〇代の若年層である。しかし八〇年代以降になると、当初単身で流出した農家の若年層が都市で生活の基盤を築いたのち、農村に残っている父母を都市に呼び寄せ、このことよって結局は世帯流出が引き起こされるといったことがみられる。これによって農村での農家の減少が引き起こされているといえる。一九八〇年代は、その意味では、農村からの人口流出のいわば最終局面に突入していると考えられる。

八九年の四つの村落での流出者総数二六八人のうち世帯流出によるものは、七四人(二七・六%)にとどまっている。
この点についてという、ここでいちいち紹介できないが、いくつかの事例調査などを照らし合わせると、農村からの人口流出にも時期的にある程度パターンの変遷があったのではないかと思う。

(2) 農村における人口流出の結果

とどまることをしらない農村からの人口流出は、六〇年代後半には、まだ労働力が過剰といわれた農村の状況をドラスチックに転換させた。七〇年代後半にすでに農村で労働力不足状況が、いわれるようになった。ただここで注意しておきたいことは、それはあくまでも総体的なことであって、個々の農村においては、その地域的特性、とくに大都市との距離の違いなどによって、労働力不足のあらわれ方には、多少の差があったとおもわれる。しかし、いずれにしても若干の地域的な差とまた時間的な差と、さらには多少の程度の差はあったにしろ、農村の労働力不足化は全般的に進行していったのである。

さて流出した農村人口の大部分が、若年層であったから、残された農村人口はしだいに高齢化していくことになった。第二表のように農家人口のうち五〇歳以上のしめる割合は、一九七〇年に一五・六％であったのが、一九八九年には三五・一％まで高まっていつている。そのことは、農村人口がたんに量的に減少してきたという以上の意味をもつものといえる。

それは第一に、農業労働力としては、劣悪化していることを意味する。

第二に、より重大な問題として、あらたに労働力が補充されなければ、韓国農業の担い手が近い将来、激減しかねないという危機を意味する。

さて以上にみたように農村における人口の減少は、農業労賃の高騰としてあらわれてくる。すなわち一九七〇年〜一九八七年に、農業労賃は十二・七倍もの上昇を記録した。これは同期間の農家販売

第2表 年齢別・性別農家人口 単位：1,000人 %

	13歳以下	14~19歳	20~49歳	50~59歳	60歳以上	合計	男	女
1965	6,769 (42.8)	1,705 (10.8)	5,238 (33.1)	1,476 (9.3)	624 (4.0)	15,812 (100.0)	7,962 (50.2)	7,850 (49.6)
1970	6,271 (43.5)	1,497 (10.4)	4,404 (30.5)	1,107 (7.7)	1,143 (7.9)	14,422 (100.0)	7,164 (49.7)	7,258 (50.3)
1975	4,780 (36.1)	1,980 (14.9)	4,212 (31.8)	1,108 (8.4)	1,164 (8.8)	13,244 (100.0)	6,654 (50.2)	6,590 (49.8)
1980	3,230 (29.8)	1,684 (15.6)	3,701 (34.2)	1,074 (10.0)	1,138 (10.5)	10,827 (100.0)	5,415 (50.0)	5,412 (50.0)
1985	2,114 (24.8)	1,271 (14.9)	2,830 (33.2)	1,129 (13.2)	1,177 (13.8)	8,521 (100.0)	4,246 (50.0)	4,275 (50.0)
1989	1,314 (19.4)	976 (14.4)	2,114 (31.2)	1,147 (16.9)	1,235 (18.2)	6,786 (100.0)	3,305 (48.7)	3,481 (51.2)

(出所) 農水産部『農林水産統計年報』各年版。

(注) 1965年度の年齢区分は、(1)15歳以下、(2)16~20歳、(3)21~50歳、(4)51~65歳、(5)66歳以上となっており、70年以降の年齢区分とは連続していない。

価格六・六倍、農家購入価格六・二倍に比べると、およそ倍のスピードで騰貴した勘定になる。ともかくこうした変化は、人力に依存した慣行的な作業のコストを高め、しだいに農業機械化にとって有利な条件をつくりだしていく。しかし、だからといって機械化をすぐに実現しえたわけではなかった。実際に機械化が可能になるまで、農家にとっていわば一種の過渡的な対応をしていかねばならなかったのである。この点についてつぎにみていきたい。

II 農業労働力不足化への対応

(1) 農業労働力編成の変化

農村人口の減少は、農村内部での雇用労働源の激減となってあらわれた。韓国では二ha以上の大規模層とりわけ三ha以上にもなると家族労働だけでの経営は、困難であってモスムといわれる年層を雇入れることが、一九六〇年代には広くみられた。もともとモスムになる労働力は、零細規模層に体力頑健な青年労働力が豊富にあったことを背景になりたっていた。しかし一九六〇年代後半にはじまる農村からの人口流出は、まずこうした雇用労働源の激減をもたらしたのである。二ha以上層については一九六五年農家あたり年間九五二時間に達する年層の労働時間は、一九八五年には三五時間に過ぎなくなっている。モスムはいまや消滅したといっても過言ではない。

さらにまた年雇だけでなく臨時雇においても減少がみられたが、臨時雇については、つぎのような特徴がみられた。

第一に、規模が大きい層ほどこの間の減少が著しいということである。規模の大きい層の方がいまでも臨時雇への依存度が高いが、

しだいに規模間の差が縮まってきたということが出来る。農村人口の減少の影響は、概して大規模層に大きく作用したといえよう。

第二に、臨時雇いのなかで女性労働の比重が急速に増えているということである。女性労働といってもいわゆる既婚女子の労働である。いわゆる「母ちゃん・婆ちゃん」農業がこの点にもっともよくあらわれている。

以上のような雇用労働の制約に対応して、家族労働が強化されるといった面がみられる。それは相対的な意味で家族労働の比重が高くなったというだけでなく、とくに七〇年代後半以降全体的にも家族労働時間が増加する傾向がみられたのである。

すなわち(第三表参照)農家労働投下時間のうち家族労働時間は、一九七〇年一、六二二時間(七五・三%)が一九七五年に一、三三〇時間(七六・七%)まで減少したがその後一九八〇年一、四四一時間(七九・四%)、一九八五年一、五九四時間(七九・〇%)まで増加趨勢をみせた(かっこ内の数値は農家労働投下時間にたいする家族労働の比重)。このことは農家人口の流出によって農家の家族数が減っているなかで、農業従事者一人当たりの労働負担を重くするものであったといえよう。問題は、田植・収穫の農繁期であった。一部の農家では、家族労働をいくら強化しようにも、そもそも頭数がとても足りないという事態にまで直面するようになる。

こうしたなかで注目される出来事は、部落レベルで共同作業組をつくってこれに対応しようという動きであった。部落のなかに行くつかの班をつくり、協議によって賃金や作業日程を決め、これにしたがって班毎の共同作業によって農繁期の労働不足に対処しようというものである。そうした共同作業組織が七〇年代とくに後半には

第3表 労働種別性別労働投下時間（1戸当り平均） 単位：換算時間

	家族労働	雇用労働	交換労働	合計	男	女
1965	1,863 (72.0)	556 (21.5)	167 (6.5)	2,585 (100.0)	1,873 (72.5)	712 (27.5)
1970	1,621 (75.3)	363 (16.9)	170 (7.9)	2,155 (100.0)	1,453 (67.4)	702 (32.6)
1975	1,310 (76.7)	295 (17.3)	103 (6.0)	1,708 (100.0)	1,139 (66.7)	569 (33.3)
1980	1,441 (79.4)	202 (11.1)	171 (9.4)	1,814 (100.0)	1,041 (57.4)	773 (42.6)
1985	1,594 (79.0)	255 (12.6)	168 (8.3)	2,017 (100.0)	1,153 (57.2)	864 (42.8)
1989	1,430 (79.4)	235 (13.1)	135 (7.5)	1,800 (100.0)	953 (52.9)	847 (47.1)

（出所）農水産部『農家経済調査結果報告』各年版。

いって全国的にみられるようになった。統計的には、共同作業組織による労働投下時間はプマシ（交換労働）として分類されている（この点は、統計事務所が確認した）が、このプマシが、一九七〇年に一七〇時間から一九七五年には一〇三時間まで減少したが、その後増加に転じ、一九八〇年に一七二時間、一九八五年にも一六八時間となっている。

この共同作業組織の成立の背景として、一時期衰退していたというものの昔から農村にみられた共同労働慣行の伝統が考えられる。代表的なものはトゥレといわれるものだが、典型的なものについていうと、夏期の中耕除草作業に各農家から一人ずつ労働力を出し、村落全体で各農家の田圃を順めぐりで作業するというものである。これはたんに共同作業というだけでなく、農薬を練り出したり、共同で飲食したり、いわば村落共同体の共同性を維持するための親睦的な性格も兼ね備えていた。トゥレは、たとえば農村経済研究院の調査村落では、三つの村落では五〇年代から六〇年代に消滅したが、一つの村落はかなり共同体的紐帯がつよく、七〇年代半ばまで残っていたという。この村落では、いまでも田植前と収穫後には儀式的に村落全体が集まって酒食をとるといいう形でその名前をとどめているという。ともかくトゥレそのものは、消滅してしまったが七〇年代後半に、かなり全国的にみられた田植の共同作業組織の外見は、作業が田植であるというもののこのトゥレに非常に似ている。ところで、当時農村では七〇年代はじめから「勤勉・自助・協同」をスローガンとするセマウル運動が政府の肝煎りで推進された。またおなじく七〇年代はじめからいわゆる「統一系」と呼ばれた多収種新品種が政府により半ば強制的に普及させられ、これに付随するかたちで集団栽培組織がつくられていた。しかしセマウル運動は、薬倉屋根のスレート屋根への改造とか村落への入路の拡張や舗装、農道の整備といったもっぱら環境事業に終始したといってもよい。セマウル運動が生産面での共同組織の形成に貢献したとは思われない。また多収種品種の普及のために取り入れられた集団栽培組織も、実際には形式だけのものが多かったようである。つまり共同作業組

織は、これらの動きとは基本的に無関係に、いわば部落の自主的な組織として形成された、とわたしはみている。

しかしこの共同作業組織にはいくつかの弱点があり、その存立基盤は脆弱であった。第一に、作業順序をめぐる各農家間の対立である。適期の田植いかんが収穫量を左右するから、どうしても各農家はこのことで必死になる。第二は、賃金をめぐる階層間の対立である。持ち出しになる大規模層はなんとか低く抑えようとするし、零細規模層は高くしようとする。ともかく結局、それぞれ参加するすべての農家で協議して決めるわけであるが、いずれにしても不満を残さざるをえない。要するにこの共同作業組織は、田植を手労働に依存せざるをえず、しかも容易に雇用労働の調達ができない状況のなかで、村落内部の農家間、階層間の対立をなんとか調整しているものなのである。農業機械化が進展していけば、当然に崩壊していくかざるをえない運命にあったものと思われる。

(2)地主と小作関係の拡大

つぎにもうひとつの労働力不足への対応として、きわめて広範にみられるようになってるのが小作の増大である。第四表にみられるようにとくに七〇年代後半以降に急増している。一九八五年に広義の小作農家（自小作・小自作・純小作のすべて）の比率は、六四・七％そして小作地の比率も三〇・五％に達しているのである。

ところで韓国では周知のように解放後農地改革が実施され植民地下の地主制は解体された。農地改革法によって小作は原則的に禁止となった。しかし実際にはその五〇年代、六〇年代を通じて小作はしだいに増加してきていた。ただ、六〇年代までの小作の発生のみカニズムと七〇年代後半以降のそれとは異なるというのが、わたし

の考えである。

五〇年代の小作農の増大は、朝鮮戦争後の農村の荒廃のなかで、農家経済が行き詰まり、没落した零細農が、農地を手放したものの、都市の雇用機会が制約されていたために、農村にとどまらざるをえず、小作農化していったものである。六〇年代においても零細農においては同様の事態がみられたが、一方大規模層では開墾などによる耕地拡大を背景に小作による経営拡大もみられた。しかしこれら農村の豊富な労働力を基盤として可能だった。しかし六〇年代後半から顕著になった農村人口の流出によって、そうした小作は後退してしまふ。そして七〇年代前半は、小作農の流出によってむしろ小作農家の比率は低下したのである。

しかし、さらに激しくなった人口流出の継続が、こんどは小作を増大させることになった。六〇年代以前には農村人口の滞留が小作増大の背景をなしていたが、七〇年代後半以降にはむしろ農村人口の流出が小作増大の根拠をなしたのである。小作発生要因が七〇年代前半を境に転倒してあらわれることになったということができよう。

そこで七十年代後半以降の小作発生の実態をもう少し具体的にみていくことにしよう。小作の発生経路として以下の四つのケースが考えられる。

第一に、もっとも多いとおられるケースは、家族の一部が都市に流出してしまい自家労働力に不足する比較的規模の大きい農家が一部の耕地を小作にだして自分は経営を縮小し、いわば在村の地主兼自作に転化するというものである。

第二に、これに次いで多いケースは、零細農が完全に離農離村す

第4表 小作農比率および小作地率の推移(%)

	自作農	小 作 農			小作地率	
		自作農	小自作	純小作		計
1945	13.8	34.6		48.9	86.2	63.4
1949	36.2	40.0		20.6	63.8	40.1
1957	88.1	7.7		4.2	11.9	4.5
1960	73.6	14.2	5.4	6.7	26.4	11.9
1964	71.6	14.8	8.4	5.2	28.4	15.1
1970	66.3	16.2	7.9	9.4	33.5	17.2
1973	70.5	12.0	8.8	8.7	29.5	16.4
1975	72.2	13.4	6.6	7.8	27.8	13.8
1977	63.9	20.1	9.4	6.6	36.1	16.5
1981	53.6	27.7	14.1	4.6	46.4	22.3
1985	35.3	62.2		2.1	64.7	30.5

(出所) 朴珍道「戦後韓国における地主小作関係の展開とその構造(Ⅰ)」
 (『アジア経済』第28巻第9号、1987年9月) 3ページより転載。

るにあたって跡地を売却処分せずに小作にだし、自分はいわば不在地主化するといふものである。

第三に、主流ではないが、一部の農家には公務員として勤務したり商業に従事したりすることで在村のまま非農家化する場合、農地を小作にだすといったケースである。

第四に、都市在住者が投機目当てで手に入れた農地を売却するま

での間、小作にだすといったケースもやはり主流ではないがみられる。これ以外に、都市へ単身流出した農家のこともが相続で農地を得たもののそのまま不在地主化するケースがある。これは第一のケースの変形といえよう。

ところでこれらが、それぞれどのくらいの割合になっているかというところ、いくつかの事例調査を勘案して、わたしはつぎのように推定している。第一のケースが四割、第二が三割強、第三が二割、第四が一割弱程度と。ただこれについて、韓国のある先生から、都市在住者の土地投機をあまりに過小評価しているという批判を受けたことがある。しかし、いずれにしても農家の人口流出を要因とする小作の発生が圧倒的に多いことは間違いないだろう。

一方、小作を引き受ける農家は、小規模層でありながら労働力に余裕のある農家である。こうしたことから小作の増大は、大規模層の経営縮小と小規模層の経営拡大によっていわゆる中農肥大化傾向(といっても絶対数が増大するのではなく、全体が減少する中で相対的な増大)の様相を呈することになったのであった。

六〇年代までは、各農家間の労働力の過不足を、農村内部に労働力が豊富であることを条件に、労働力の雇用・被雇用関係によって調整していた。これが七〇年代後半以降になると、労働力を農家間で動かすのではなく、地主・小作関係で土地を動かすことによって調整することになった。小作が労働力不足下の農村では、労働力過不足の調整機能を果たしたといえる。

しかし、これも労働力不足への対応として決定的ではない。やはり農業機械化がどうしても必要になってくる。つぎに農業機械化についてみていこう。

(3) 農業機械化の現状

まず韓国における農業機械の普及の現状を一九七〇年以降主要な機械の普及台数、普及率についてみたのが、第五表である。

まず七〇年代における農業機械化は、なんとといって耕耘機が中心であった。一九七〇～一九八〇年にかけて、普及台数は耕耘機が二四倍、動力防除機が七倍、そして動力脱穀機が五倍に増えた。こうして一九八〇年には、これらの農家普及率はそれぞれ十三・四%、十五・四%、十・二%とすべてが十%を突破した。このうち、動力防除機と動力脱穀機は六〇年代に普及していた人力式の防除機や脱穀機に代替するものとして、その普及はすでに七〇年代以前からはじまっていた。これにたいして耕耘機の普及は、七〇年代にはじまったといつてよい。七〇年代にもっと急速に普及したのが、この耕耘機であった。これに比べるとトラクター、田植機、バインダー、コンバインなどは、七〇年代にあつては普及の端緒にもつていないような状態であつたといふことができる。労働力不足がもっとも問題になるのは、もっとも労働ピークになる田植と収穫であつたが、七〇年代にはまだその機械化はほとんど進んでいなかった。これらの普及が進むのは八〇年代、それもやつと八〇年代後半以降のことであるといえる。

そこで八〇年代における農業機械化の動きに目を転ずることにしよう。七〇年代に普及の主役であつた耕耘機、動力防除機、動力脱穀機は、八〇年代にはいってもその普及台数を増加させている。とくに耕耘機は依然として急速に普及しており、一九八九年には普及台数七四万台、普及率四一・七〇%にたつている。動力防除機もこれにおとらず増加をつづけているが、動力脱穀機のほうは八〇年

第5表 韓国における農業機械の普及状況 (単位:台、%)

	耕耘機	トラクター	田植機	バインダー	コンバイン	動力防除機	動力脱穀機	乾燥機
1970	11,884 (0.5)	61 (0.0)	-	-	-	45,008 (1.8)	41,038 (1.7)	
1975	85,722 (3.6)	564 (0.0)	16 (0.0)	-	56 (0.0)	137,698 (5.8)	127,105 (5.3)	694 (0.0)
1980	289,779 (13.4)	2,664 (0.1)	11,061 (0.5)	13,652 (0.6)	1,211 (0.1)	331,912 (15.4)	219,896 (10.2)	1,616 (0.1)
1985	588,962 (30.6)	12,389 (0.6)	42,138 (2.2)	25,538 (1.3)	11,667 (0.6)	517,530 (26.9)	301,717 (15.7)	5,437 (0.3)
1989	739,098 (41.7)	31,328 (1.8)	111,937 (6.3)	49,816 (2.8)	32,882 (1.9)	676,815 (38.2)	284,837 (16.1)	13,813 (0.8)

(出所) 農水産部『農林水産統計年報』各年版。

(注) かつこ内は普及率(保有台数/総農家戸数×100)をあらわす。

代の半ばでほぼ頭打ちの状態にある。普及速度という点で耕耘機以上であるのが、トラクター、田植機、バインダー、コンバインといった、いわゆる新機種である。一九八〇年を基準にして一九八九年までの普及台数の増加をみると、耕耘機が約二・六倍であるのにたいして、トラクター十一・八倍、田植機十・一倍、バインダー三・六倍、コンバイン二七・二倍などといずれも耕耘機の普及速度を大きくうまわっている。しかしこれらが、急速に普及しているといっても、もともとの普及台数がごくわずかでしかなかったこともあって、一九八九年現在の普及率はもともとも高い田植機でも六・三%、ついでバインダーが二・八%、トラクターやコンバインは二%と二%にならんとするにすぎない。普及率をみるかぎりでは、こうした機械化はまだまだの水準でしかないようにみえる。ただ実際の農作業における機械化率をみると普及率の割には相当に機械化が進んでいる。すなわち、ある事例調査で一九八四年時点で、田植一九・一%、収穫十六・八%が一九八七年時点で田植三六・八%、収穫三五・八%というデータがある。それでもわたしは、日本などに比べるとまだまだ韓国の農業機械化は遅れていると議論していた。しかし昨年（一九九一年）に訪韓して、実際に作業をみたわけではないが、聞いたところによると、ほとんど一〇〇%とよほど機械化されているとのことだった。韓国農村経済研究院の調査村落においても、平野部と中間部では、田植・収穫とも一九八九年にほぼ九〇%の機械化率になっている。八〇年代末からここ数年の間に急速に機械化が進展したものと思われる。一部山間地域などは別にして、米作の機械化はほぼ完了したといつてよいだろう。

ところで機械化の進展が、これまでみられた農業労働の再編成や

小作をどう変化させたのかについて述べておこう。共同労働についていえば、これはまずほぼ解体されたといつていい。そして、各農家による農作業の個別化をますます進展させているようである。小作については、減るのかどうか、いちがいにいえない。たしかに機械化によって、小作地を回収し自作化するといった事例もみられる。韓国農村経済研究院の調査村落のひとつでは、これまで純小作農であった農家が、機械化によって小作ができなくなりやむなく農外就業に転業するといったことが示されていた。しかし、逆に小作によってさらに規模拡大しているケースも紹介されている。こうしたことから、機械化がこれまで増大した小作にどんな効果をもたらすのかは、いちがいにいえない。ただいずれにしても機械化は、三〇〜四〇代という比較的若い労働力が担っており、こうした労働力を保有しているかどうか、が重要な要因になっている。大規模層でそうした労働力があれば、これまでの小作地を回収して自作化する場合もあるうし、零細規模層でもそうした労働力があれば、さらに小作で規模拡大し、機械化宮農をする場合もあるう。

さて予定では、さらに農業生産と農家経済についても話す予定であったが、あまりに時間を費やすぎたので、もし質問との関連で触れることができれば、話すこととし、いちおうここで話しを終えたいと思う。

（本稿は、当日報告のために準備した原稿を発表後、実際の報告にそって一部修正したものであるが、報告そのままの記録ではないことをお断りしておく。）

〈討論要旨〉

韓国の農業構造の変容について、報告は、日本農業との構造上の類似点と相違点を明示することから始められた。これは、専門外の会員たちの理解を促すための報告者のご配慮であり、質疑もそれに呼応する形で呈示された。

まず、日本では、農村での労働力不足を解消する方策として、高度経済成長期に耕地の交換分合・耕地整理などが政策の一環として行われ、そのもとで機械化を促進していった経緯があるが、韓国では耕地の交換分合・耕地整理などが行われているのか、という質問がされた。報告者からは、一区画約一〇〇〇坪の規模の耕地整理が平野部から着手され、一九八七年には近郊部では完了し、現在、中間部地域へと進行中であることが述べられた。

第二点めに、工業化の進展が、農村からの人口流失とそれによる労働力の不足をもたらした点で日本と韓国は共通しているが、日本では農村内部でも兼業化が進行したのに対して、韓国は趨勢的に兼業化が進行してはいるものの、一九八七年の専業率が七八%と高いのをどう捉えたらいいか、という質問が出された。この点に関しては、七〇年代に工業化の進展にともなう人口流出が、農村内部の農業労働構造を労働力過剰から労働力不足へとドラスチックに転換させながらも、農村工業の未発達により農村内および近隣に就業場面がないために、兼業化が進行するよりも、離農や挙家離村といった形で農家そのものが急速に減少していつているのである。よって、農業専業率は、朝鮮戦争後の九〇・七%、七〇年の六七・七%、六五年の八〇・六%、八〇年の六七・二%で推移していることが説明された。しかし、その一方で、五三戸二〇三人の「亀尾」集落では、

近隣に三星工場があるにもかかわらず、農家の関心はもっぱら工場排水による公害問題に向けられ、工場に勤務するものは皆無である例をあげられながら、工場労働としての農民の労働力の質についての検討が課題として残された。

第三点めが、韓国の稲作は七〇年代後半には自給可能となったが、日本のような米過剰と生産調整といった状況に進展しているのか、という点である。七〇年代には、一方で農村からの人口流出がつつき労働力不足が深刻化する一方で、他方では、労働集約的な「統一系」多収種新品種の栽培の普及が、政府により半ば強制的にすすめられた。同品種の生産量は、八〇年代に入り減少したものの、その「統一系」品種の栽培において早期栽培や高温苗代といった技術が、この間に農家に定着したことの意味は重要であることが指摘された。現在、米は過剰気味であり、市場解放への危機感も多少なりともあるものの、生産調整の必要性はまだないことが説明された。

その他、法人経営の状況についての質疑に対しては、経営形態としてはまだ端緒でしかないが、九〇年に韓国では二番目に設立され、九一年より運営されている具体的な事例の紹介があった。

また、小作料水準についても討議された。現在、小作料は収量の四割程度であるが、小作発生メカニズムからすれば小作料はもつと下がってもいいはずであるが、かつて収量の五割が現物で支払われていた慣行の存在がその背景にあるのではないか、ということが報告者によって指摘された。

最後に「統一系」品種導入の際に村落レベルで組織された共同作業班の結合原理を、屋根の葺替えや農道整備など環境改善事業や所得増大事業に終始した七〇年代初めの「セマウル運動」にみるので

はなく、トゥレなどの伝統的な共同労働慣行の存在にみる報告者に
対し、時期を同じくするセマウル運動と共同作業班との関係、およ
びトゥレそのものの説明と、共同作業がもたらした村落構造の具体
的变化の説明が求められた。この点に関しては、報告者の「七〇年
代韓国における農業労働構造の変動」（『アジア経済』第二五巻第
一号、一九八四年一月）および「八〇年代韓国農業機械化の背景と
現状」（『アジア経済』第三一巻第四号、一九九〇年四月）に詳細
は記されているので、ここでは同論文を参照しながら合わせて要約
してみよう。まず、トゥレについてであるが、伝統的な共同労働慣
行として代表的なものとして、そのほかに洞トゥレ、とプマシがあ
げられる。洞トゥレもトゥレも、共同作業種類は水田除草が主であ
るが、洞トゥレは、一農家から成人男子一人の出役が義務づけられ
部落全体の強制的性格がつよい。また、部落の共同財産ないし共同
費用の捻出という目的もっており、面積に応じて課される共同作
業賃は経緯費を差し引かれた残りは部落の共同財産となった。トゥ
レは、部落の一部の農家が農作業の共同処理が必要だと感じた場合
に組織され、しかも出役は一人に限らない、その精算方法も労働交
換であったり、金銭または現物での決済が必要に応じておこなわれ
るなど、部分的任意的性格が強い組織である。その他に当番農家に
よって食事や酒がふるまわれ、共同飲菜の機能も有していた。プマ
シは、労働交換を意味し、必要に応じて相互に労働の手間替えをす
ることである。トゥレとの厳密な区別は難しく、両者とも任意的性
格が強いが、プマシのほうが部落内における相互扶助精神にもとづ
く融通性により富んでいる。こうした伝統的共同労働慣行それ自体
は衰退していくものの、七〇年代に入って農業労働不足に対処する

ために部落内で自主的に組織された共同作業班は、トゥレが下敷き
になっている。ただし、作業対象が多くの場合田植えに限られてい
ること、運営がより民主的に行われていること、共同飲菜の要素を
取り払らい、また共同炊事化することで女性労働も含めての農作業
労働時間が拡充され、さらに労賃のための記帳が徹底されるなど、
トゥレに比べて合理化が進んだ。しかし、各農家間では適期に田植
えをするために作業順序をめぐっての対立が生じ、一方階層間では
労賃水準の決定をめぐる対立を生むといった存立基盤の脆弱性が指
摘される。しかしながら、それぞれの経済的メリットの存在、およ
び稀薄化してはいるものの部落相互扶助精神の存在が組織の分解を
押しとどめた。また、「セマウル運動」とのかかわりについては、
例えば行政当局が農業生産上の共同作業の組織化に介入するような
直接的機能は持たず、農村の里長（里は日本の部落に相当）の下に
組織されたセマウル指導者の存在が、共同作業班の成立を側面から
精神的に支援する機能を果たしたにとどまった。しかし、共同作業
組織は手労働を中心にした技術体のなかでの対応であって、七〇年
代から八〇年代にかけての農業機械化の進展とともに解体してい
き、部落のセマウル指導者も存在しない地域もでてくるといった変容が
確認されるようになった。

以上が討論内容の要旨である。報告者は「韓国における地主小作
関係についての論点」（『アジア経済』第二九巻第一二号、一九八
八年二月）のなかで、地主小作関係について解放前・後の間にな
んらかの「連続性」があるかどうか、つまり、解放後に実施された
農地改革の歴史的意義をどう評価するか、という点についてふれて
いる。この点は農地問題にとどまらず、「韓国や台湾などのアジア

NICsの工業化の成功要因として、日本の植民地時代以の制度的、人的蓄積との関連が問題にされる。「連続性」を重視するののか、「断絶性」を重視するののか、韓国資本主義論争の一環としてさらに詰められねばならない課題」としながらも、「断絶性」を前提にしながらもそのなかにみられる「連続性」にその基本的な視角をすえている。本報告ならびに討論においても、「変化のなかでの連続性」という報告者の視座が、たとえば小作料が高水準で設定される背景や、共同作業班の組織下の際のトゥレとの関わりを解くなかで具体的に示されていたように思う。

(文責 杉原たまえ)

有賀喜左衛門の資質の形成

中村 吉治 (遺稿)

有賀喜左衛門さんのことは、没後すぐから何度か小文を書いた。小文でもいくつか書けば、もうこの上に書くことはない。同じことの繰り返しになってしまふ。しかし、かつての仏蘭西書院の主で、喜左衛門さんと古い御縁のある宮坂栄一さんの『信州白樺』が喜左衛門さんの特集をやるとあっては、何ほどかお手伝いをするべきであらう。喜左衛門さんと白樺の関係については実は私は知らない。深い因縁がありそうだとはい、いつも推察していたけれど、まとまった話をしてくれたこともないし、改めて聞いたこともない。むしろ、『信州白樺』のこの企画によって、その全容か、そうでなくとも片

鱗を知ることができればと、私は期待しているのである。この問題について、どなたかの文章が見られるかも知れないというのが、私の楽しみである。勝手なことを考えて申し訳ないが、そんな期待を含めると、些少でも御手伝いしないわけには行くまい。しかし、はじめにいったように、喜左衛門さんの没後にいくつか追悼文を書いたし、生前にも私の知る一面を述べたこともあるわけで、多少それらと重なるのを覚悟の上で、それでもできるだけ新しい角度で、この私にとって重大な人物の小さな影でもこのさい写しとめて置くことにしたい。

信州における白樺の運動の波は、私たちの小学生の間によって来て、過ぎて行ったらしい。とにかく私には直接の思い出はないし、思いあたるふしもない。しかし、いつだったか、信州白樺事件の犠牲者の一人中谷勲氏と会ったとき、「先生なぜもう来ないのか」と聞いたら、「来ちゃいけないというのでな」と答えたのを覚えていた。それだけのことであって、前後、何の記憶もないが、これだけのことをいつまでも私は覚えていた。

喜左衛門さんとの「つきあい」は、私が中学生になってからである。小学生の私が喜左衛門さんから雑誌を沢山買ったことがあるのを覚えてなつかしく別に書いたことがあるが、その頃は私の方が「つきあえる」年齢ではなかった。小学生としては赤羽の真金寺の坊さんが朝日小学校の体操場で話をし、いま世界で一番偉い人はトルストイだといって私たちをびっくりさせた記憶がある。明治大正の子としては偉い人は軍人のことだと思っていたから、これには驚いた。この坊さんは東京の大学を出て来て、われわれには当時何も

わからなかったが、いろいろ新しいことをやったために、評判が悪
い人だった。しかし、新知識であったことは確かである。喜左衛門
さんとは友人であったかも知れないが、そのあたりはわからない。
その頃、喜左衛門さんはまだ第二高等学校の生徒であったはずであ
るが、交遊はあったように思える。中谷勲氏などが両方の友人で
あったことは間違いない。そんなことがいろいろ断片的に浮かんで
来るが、まとまっていこうだといえることは私にはない。

喜左衛門さんが白樺の人たちと交渉のあったことは、のちになっ
ていろいろと知った。喜左衛門さんは武者小路実篤に作品を見せて
ほめられたことがあるといい、その後、どこかで偶然再会したとき
もうあんな仕事はしていないのかと尋ねられたことがあったといっ
ていた。武者小路があ作品を覚えていてくれたよといって、
この話をしてくれたのは、私がもう大学生になっていた頃であった。
また、柳宗悦とも、民芸品を介したり朝鮮を介したりしてかわり
があった。それと柳夫人の兼子とも音楽か何かを仲立ちにして、や
はりつきあいがあったようである。しかし、武者小路の場合を別に
すれば、喜左衛門さんの仕事や好みから、また、喜左衛門さんの話
の中に名前が出て来たことから、私が類推しただけのもので、喜左
衛門さんの口からはつきりとその話を聞いたわけではない。何しろ
喜左衛門さんにそういうつきあいがあったと思われる頃は、私など
まだ子供で、話相手にはならなかったし、辛うじて話相手になれた
頃には、もうそうしたつきあいは喜左衛門さんにとって過去のこと
になっていた。しかし、有名人とのつきあいはとかく誇示されやす
いもの、それほどの関係ではなくとも、過去のことでも、また聞か

れなくとも話したがるものだが、喜左衛門さんにはそうした性癖は
まったくなかった。おかしいくらいなかったが、別にかくすとい
うわけでもなかった。こちらは中学生になり、また高校生になるにつ
れ、そんなことに興味が出て来て、何かと想像してみたこともあ
ったが、これ以上の話にはならない。それでもこんなことから、喜左
衛門さんが白樺と、また白樺の人たちと何らかの交流があったこと
だけはわかる。かなり深い関係であったかも知れない。本当はこん
なことを詮索してもしょうがないが、喜左衛門さんの性格や行状の
中に、それがどんな風に現れていたかということは大いに興味のある
ところである。つまり、古い問屋ヤマキの長男として生まれ、そ
の問屋は問屋としての活動はもうやめて、地主として落ち着いた伝
統ある村の長老であった父の喜左衛門さんから名前と家もろともに
伝えられたに違いないわが喜左衛門さんの性格や行状に新しく付け
加えられたものを、少しでも明らかにできればという希望があるか
ら、乏しい痕跡ながらも探ってみたい気がするだけである。

痕跡は、私どもが大人になりつつある時期にもながしか見えか
くれている。武者小路との関係の深淺は不明だが、喜左衛門さん
は一時期その家産の「解放」を思ったときがあったらしく感じられ
たことがある。武者小路の新しい村や有島武郎の広大な土地の小作
人への解放といったセンセーショナルな事件があったのと重なって
くる。喜左衛門さんが音楽を好み、ピアノを買いこんで作曲まで試
みたことは、自作の曲を中学生のわれわれに唄わせようとしたりし
たことからはつきりしているが、そのあとに折角愛用していたピ
アノを小学校に寄付すると宣言したことがある。どうも喜左衛門さん
が大学を卒業してから、私が高等学校に入る頃だったと記憶してい

る。当時、貴重品で、村の誰もがみたこともないピアノを寄付するというのだから、とうぜん話題になった。このこととダブって覚えているのは、私が三高に入り、フランス語を習って二年目になった頃、喜左衛門さんに何か読むべきいい本を教えてくださいと手紙を書いたら、早速リストを送ってくれた。それにはマルクスの『共産党宣言』をはじめ、バクーニンやクロポトキンの書数冊のフランス語版があった。いかに好学でも、二年生にこうした本が読めるはずもないが、そのときは初等用かも知れないと思って丸善へ行って聞いてみたら、怪訝な顔をされ、ないといわれたので、そのままになってしまった。あとで思い返すと不思議な気はするが、白樺の人たちには、当時バクーニンやクロポトキンなど無政府主義者のものが読まれていたようであるから、そんな影響があつたのかと思う。そして、ピアノ一件もこういうなかでの生活と心理の反映だったのではなからうか。寄付を宣言したが、一向に送ってくれぬと村の方でぶつぶついつているようなこともあつた。寄付はもうやめたのだという噂も流れたが、それは間もなく実現した。しかし、その間に思想や行動に不安定なところがあつたのかも知れない。私が学生になって、喜左衛門さんにより近くて万事を導いてもらった頃は、もはやマルクスやバクーニンやクロポトキンの名前も著書も話題にすらなかつた。

柳宗悦を喜左衛門さんに関して連想するさい、芸術に対することはもちろんだが、重要なのは朝鮮問題である。喜左衛門さんは朝鮮に旅行したことがある。慶州石仏寺の見学が主目的だったと聞いている。大学の美学の卒業論文作成のためだったという。彼地で求めて来たという陶器の鉢と銅製の大きなスプーンを見せて貰ったこと

がある。そのスプーンをかざして、この美しさはどうだといわれても、私などハハンとうなずくだけだったから、張り合いはなかったろうが、喜左衛門さんはそんなことでたじろぐ人物ではなかったから、その美を説き、朝鮮美術全般に及んでやまなかったことをおほえている。そして、そうしたことは、最後まで変わらぬ喜左衛門さんの態度であつたが、そんな話のなかで柳の民芸運動のことがでてくることもあつた。しかし、朝鮮問題は喜左衛門さんにとつてもっと大きい意味があつたようだ。それはずっと晩年になって聞いたことだが、自分で話し出したことである。この旅で喜左衛門さんは慶州のほか各地を訪れたらしいが、あげくに赤痢にかかつて入院したりして思わぬ長逗留になったのはともかくとして、日本の朝鮮に対するやり口にことごとく腹を立てて帰って来たとのことである。日本の植民政策はもちろん悪いが、日本人の朝鮮人への対し方がよくないことをつくづく知つたというのである。喜左衛門さんはこのことを何か運動に結びつけるようなことはしなかつたし、できもしなかつたのだが、その心情に反権力の感情が濃くなつて来たようである。喜左衛門さんが私にマルクスやバクーニンやクロポトキンの著書を読んだのも、その頃だつたと思えるし、ピアノを寄付しようとしたのも、自分の生活の見直しを考えたらしいのも、こんなことが作用していたかと思うのである。

喜左衛門さんが白樺、とくに武者小路の思想・行動に惹かれたのは、こうしたいきさつがあつたことであらう。そのあたりのことを喜左衛門さんは話したことはなかつたが、朝鮮の印象を強く受けたことを語るそのうらには、こうしたいきさつがあつたのではなからうか。もっとも喜左衛門さんは、そのうち、社会主義が嫌いに

なつた。白樺からも離れたようだが、これは嫌ってはいなかったやうである。しかし、社会主義は単に離れたというだけではなく、嫌つたし、憎んだといつてもよい。なぜそうなつたのか、いぶかしいくらいのものだったが、一時期それに心を寄せていただけに反動が大きかつたのかも知れない。そういう話、それだけの例ならいくらでもある。しかし、喜左衛門さんは嫌うだけでなく、反対の筋を立てることに努力し、ある程度成功した。それは反動的言辭を弄するといふのではなく、積極的に自己を建設したのであり、喜左衛門さん自身はかなり満足したであらう。『日本家族制度と小作制度』にいたる研究である。地主・小作制度について、社会主義の主張するところを排し、自己の主意で体系づけたのである。単なる反動ではなかつた。これはあとでまた触れる。

白樺からの連想で、喜左衛門さんについてこんな風のみてきたが、その文学好きは自ら戯曲を書いたことからわかるように、終生変わらなかつた。そういうなかで、人道主義はむしろ生得のものだつたらう。それが明らかに白樺に触れ、無政府主義に惹かれることで、性格を色づけたり、深めたりしたまでのことだつたらうと思う。そして、生得の性格が磨かれたのであらうが、それがどう發揮されたかという過程については、実は私などは効なすぎでよく分らなかつたといふべきであつた。あとになって右に述べたような片鱗に接しただけである。しかし、そこで分ることは、喜左衛門さんは常に自信をもつており、またいつも人に及ぼそうとしていたのである。教育者だったのである。私についていえば、やはり常に教えられる立場だつた。ただ、喜左衛門さんの場合、ナマの知識を「教」えるのではなくなかつた。基本的な文献を教えるくらいで、あとはその生活の

なかで悟らせるという風であつた。それもまた生得の性質からだつたらう。

そうしたものを生得の性質とみるには、喜左衛門さんの家を知ることが必要であらう。ここでは私の見聞だけで、そのこまかいことはわからない。私は、第一、本来のヤマキの間屋活動の片はしも知らないのだ。ほのかにわかるのは、明治になってからの、平出宿廃止後のことである。しかし、考えてみれば、それも伝聞が多い。私の直接の見聞は明治も末年以降のことである。村では第一位の地主であつて、ゆつたりした先代の喜左衛門さんというのも、私が生まれて一年後の明治三九年に亡くなつてゐるのだから、直接おつきあひがあつたわけではない。ところで、先代の喜左衛門さんは、明治三年の生まれだから、生まれたときから平出宿は廃され、問屋としての用はなくなつてゐるわけであるが、村の中心人物として学を好み、本を読み、多趣味な生活人だつたという。しかし、先代の喜左衛門さんは、それだけではなく、新時代のリーダーとしてさまざまな足跡を残してゐる。『上伊那誌』などによれば、明治二二年に平出英数学会をつくり、明治二三年には朝日青年同志会を組織して朝日小学校への高等科設置運動の先頭を切つた。明治三二年には平出銀行の發起に加わり、設立後には取締役になつて活躍するとともに、同年、朝日村学務委員として朝日尋常高等小学校の新築に尽力してゐる。そして、明治三四年に朝日村会議員に当選し、明治三六年には上伊那郡会議員になつてこれから一層の活躍が期待されたときに、三七歳で世を去つたのである。だから明治三〇年生まれのをれわれの喜左衛門さんは父の喜左衛門さんから生前に本格的な薫陶をうけていたはずはないが、家の伝承といふべきものはきちんと承継い

でいる。われわれの喜左衛門さんは父喜左衛門さんの前に早く実母を喪っていたから、必ずしも恵まれた幼年時代をおくったとはいえないけれど、不思議ともいえるほど生得の才幹が感じられた。不思議というのは、家の実務には幼少時に関係したはずもないし、中学生からは寄宿生活に入り、休暇以外は平出の家に帰っていないにもかかわらず、郷土愛を強烈に持っていたことである。これはもう父喜左衛門さんと思えば、家による伝承としかいいようがない。『上伊那誌』に出てくる父喜左衛門さんの伝記は、実はそのままわれわれの喜左衛門さんのそれにあてはめてもおかしくないのである。われわれの喜左衛門さんが「家」を極端なまでに重視したのは、「家」に恵まれなかった喜左衛門さんが、それにもかかわらず、おのずからして「家」を感じていたからも知れない。

とにかく、そうした喜左衛門さんの資質は、白樺に由来するものではないと思うし、もちろん社会主義からは出て来ない。生得のものであるというものは、それゆえである。自己の家・父祖から受け継いだものとみるべきである。多感な青年時代に、白樺に触れ、トルストイに感動し、日本の植民政策に腹を立て、社会主義に魅力を感じたり、というように、思想形成過程において身につけたものもたしかにあるだろう。いろんな思想が、渾然と喜左衛門さんの精神のなかを通りすぎて、しかもいずれも何ほどの栄養分を残して行ったことは間違いない。それは思想というだけでなく、日常の生活態度一般に及んでいたし、趣味というには深すぎる美術の愛好ぶりなど、計算に入れないものを含んでいる。父喜左衛門さんには、啓蒙的活動家としての語学習のほかに、読書・美術・茶の湯などにわたる広汎な好みがあったそうだが、そういうものが遺伝するの

どうか、私は知らない。しかし、喜左衛門さんにはそうしたものの遺伝をふまえた才能・嗜好が脈々として生きていた。そのさい、学校や友人やそのほか考えうるものの影響を説くこともできるかも知れぬが、とてもそんなものではないことを喜左衛門さんを知るものはわかっているだろう。

このような遍歴のあとに、喜左衛門さんがぶちあたったのが、柳田國男とその民俗学だったようだ。その接触がどんなぐあいだったかは知らない。話したこともない。私が三高生でマルクスなどの著書を紹介されて驚かされたあと、大学生になる頃は、そんなことは何もなかったように、喜左衛門さんは民俗学徒であり、博学家であった。柳田國男を推奨すること、きわめて強いものがあつたが、これは喜左衛門さんの一特質、思いこんだら深くつきつめ、また人に語ってやまぬというところによるものである。その頃、ようやく私なども喜左衛門さんに相手にされるようになったばかりであったから、そう感じたのかも知れない。ただ、喜左衛門さんは推奨はするが、しかし是非やれという勧め方はしない。だから私が大学の国史学科に入ったのは、影響がなかったといえは嘘になるが、喜左衛門さんに直接勧められたりしたからではない。私なりにそれがよさそうだと思つて選んだのであるが、その結果をみて、喜左衛門さんは否定せず、勉学のことについていろいろと激励してくれたのである。もし進学の相談に行っていたら、喜左衛門さんは自分に執して宗教学あたりを勧めてくれたかも知れぬ。もっとも、私の場合、喜左衛門さんの意にかけ離れた選択をしていたとしたら、喜左衛門さんはきつと文句をいっただろうと思う。なぜなら、喜左衛門さんは相談すればいろいろ文句のある人であり、また、みづから恃して強

自信をもち、熱心に自己を主張する人でもあったからである。そして、喜左衛門さんのそうした気質は、やはりすでにみてきたような、村にあっては長老・指導者、おおくの小作人をひきいた「大家族」の家長という位置において養われたものだったろうと思う。それはさておき、喜左衛門さんの柳田國男への傾倒は相当なものだった。たとえば、柳田流に小祠をのぞいて歩く。それはたしかに私などには面白いが、喜左衛門さんは、誰にも面白いと思って疑わなところがあった。だから、喜左衛門さんは中学生を連れて村のなかを歩く。家々の間取を調べて歩いたことがあった。帳面に線を引き、これがイロリだの座敷だのと書いて行くと、何か今まで何気なく住んでいた「家」が意味ある生きものにみえてくるのが面白く、親類の家を分担して記してまわったことがある。この成果は『民族』に載った。どこの家にも仏間があるが、そこには大抵「不幸信帳」が束になってかけてある。それを取り出して書き写したり、そこに出てくる家々の関係を聞いていると、えらい学問があるもんだと感心するようになり、親類中のものをがさがさとみて歩いたりもした。これもまとめられてやがて雑誌に載った。だから、そういうわけなくても、真似をする奴がいくらも出て来た。面白いと思わぬ者にはついて来ないだけの話であったが、そうしたことにもっともびったりだったのは、小学校の先生たちだった。いつの頃からか、郷土研究ということばが流行し、研究とまでは行かずとも、それを口にする先生たちはいくらもいた。郷土研究という口当たりのいいことばの中味は大変むずかしい。口にするほどにはわからない。しかし、そのなかに入っていくには、喜左衛門さんの流儀はまったく適切であった。理屈より先に、事実の面白さがあった。喜左衛門さん

んの、そして、わたしの家のある平出、伊那に『露原』の集団が生まれたのはそうしながらのことであった。しかし、その場合も『露原』同人が喜左衛門さんの影響のもとで方向を固めて行くとき、あくまで自主的なものとし、喜左衛門さんを代表とする組織化という形式も実態もとらなかつた。喜左衛門さんは助言というより感想を述べるような態度に終始した。しかし、それは冷たい軽い批評ではなく、熱が入っていた。自主性を重んじた上での喜左衛門さんらしいかわりであった。『露原』の成長は、たがいに批評し、褒めあい、話し合うなかで、めざましかったが、その間に、喜左衛門さんは同人を洪沢敬三や柳田國男に引き合わせた。そういうところは積極的であった。

このような喜左衛門さんも、戦後、開きなおって教育にたずさわらねばならなくなつた。東大講師から東京教育大学教授になり、社会学を講じることになつたからである。この社会学ということ喜左衛門さんのやってきた民俗学との関係は大変面白いが、そのうち周辺に文化人類学が流行し、やがて定着するようになってきた。こうなってくると、喜左衛門さんも学問の体系といったものを考えなければならなくなり、『露原』同人を相手にしていたような態度ではすまされなくなつてきた。大学というところは、頭のいい奴もいるが、不熱心な単位稼ぎだけの奴も相手にしなければならぬ。学ぶことと知るといふことを大切にし、何かを教えることは不得手で、また、そうしたことを信条としていたかもしれない喜左衛門さんが、どんな風にして教壇にたっていたかは私にはわからない。しかし、現に優秀な社会学者を何人も育てたところをみると、優秀な教師だったと思うが、それは喜左衛門さんに教わつた人にも聞くほか

あるまい。喜左衛門さんがみずからそういうことについて語ったこととはない。しかし、優秀な門弟については楽しそうに自慢していたことはある。

いろいろな面から喜左衛門さんの人物の底を探ろうとしてきたが、結局、容易につかまえることはできない。喜左衛門さんは大地主で、明治の開明派であった先代喜左衛門さんの長男であり、その家の性格を一ばいに底の柱として持っていたようである。長ずるにつれて、喜左衛門さんには白樺の人達の人道主義が大きく影響し、さらに社会主義の思想も影を落したが、そのいずれにも満足できず、柳田民俗学に到達したところで、あたかも青年期を終り、目ざましい活躍をみせることになったのだ。そして、喜左衛門さんは幸福な結婚をした。内外ともに大人になったわけだが、この結婚で新しく松本の大商人のもつ伝家の「文化」が合流した。到底その細部にわたって述べることはできないが、一つだけとってみると、喜左衛門さんが「家と家との縁組」を徹底的に主義としていたことは、みずからの結婚の実質をふまえたものであり、それが生涯変らず、戦後の自由恋愛時代にもびくともしなかったのは、その思想の底に自己の体験が息づいていたためとみられる。

喜左衛門さんは、こうして大人になり、その頃から科学的な方法ということに重点を置き始めたようだ。それは柳田民俗学があらわに出さなかったことで、ひいて入りやすくはあっても弱いものになりがちだったなかで、あきたらなさを感じてきたからであろう。そして、また、ここでも夫人の兄の哲学者池上謙三氏による科学理論、特殊科学の理論の練磨があったと、私は信じている。

さて、喜左衛門さんの内面をのぞきながら、その生まれの持った意味と、成長するにつれて、時代の変化や人間的な接触の変遷のなかで喜左衛門さんの人間性が形成されて来た道を何とかつきとめようという私の意図はどうやら不完全燃焼に終わったようだが、この稀にみる人物について将来にわたって研究することは、あとに来た諸氏に必要なと思うし、そのために何かのきっかけになるかも知れぬと念願して、不本意ながら筆をおくことにする。

〔解説〕 いつだったか正確には覚えていないが、中村吉治先生の紹介で『信州白樺』を主宰している宮坂栄一氏にお会いした。宮坂氏は大正の終り頃、仏蘭西書院を経営し、有賀喜左衛門先生と古いゆかりがあったことから、有賀先生の没後、『信州白樺』で有賀先生の特輯号を出したいということで、中村先生に相談にこられたので、中村先生は私を宮坂氏に引き合わせ、協力してやってくれということであった。私の協力といっても、村研関係で有賀先生の学恩をことうむったと思われる方々のリストを作り、宮坂氏にわたしたぐらいのことであったが、そのうち、宮坂氏が鬼籍に入られ、中村先生も間もなく世をさられた。『信州白樺』の特集号は、宮坂氏の没後、関係者の努力で、一九八八年二月に銀河書房から「有賀喜左衛門・岡正雄特集」という形で刊行されたのであるが、それには中村先生のものは載っていない。私も中村先生が亡くなられてから、遺稿の整理をさせていただいたが、実はそのときは、この原稿を発見することができなかった。その後、大分経ってから、中村先生の長女の小松啓さんから、家のなかを整理したら出て来たということで、何冊かの大学ノートと一括の原稿をお預りした。そのなかに、この原

稿があったわけであるが、村研になお有賀先生・中村先生の警咳に接した方も多く、また内容的にもふさわしいと思われるので、『研究通信』への掲載をお願いした次第である。なお、原稿のなかに、もう一点、『信州白樺』用に書いたものがあったが、この方はやはり両先生がしばしば執筆をしていた『伊那路』の方に掲載をお願いした。中村先生が『信州白樺』用に二つの有賀先生に関する原稿を書いていたのは、多分、私がお伺いしたときにでも、私にみせて選択をさせるつもりであったかも知れない。私としては、両方を読み、どちらも捨て難い味があると思われたので、このような措置をとることにした。

(岩本 由輝)

一九九二年度 第三回運営委員会

日時 一九九二年二月二三日

場所 中央大学駿河台記念館

出席者 松田苑子、長谷川昭彦、吉沢四郎、鳥越皓之、北原淳、

高橋明善。

報告事項 年報編集委員会から、年報の抱えている問題点、年報講読についての会員アンケートについての報告があった。また、それに併せて、関西で開催した第二回運営委員会での村研のあり方、年報のあり方についての意見を事務局から紹介した。

年報だけでなく、村研そのものの組織運営を考えなおす必要があるという意見が多数を占めた。

第二回研究会案内

日時 一九九二年七月十八日(土) 午後二時より。

場所 同志社大学(今出川校舎) 徳照館一階会議室

(地下鉄「今出川駅」下車、徒歩三分)

報告 ①桜井 浩氏(久留米大学)

「韓国における農地改革以降の土地制度を中心に(仮題)」

②酒井俊二氏(滋賀大学)

「日韓漁村の社会経済的構造と機能の比較的考察(仮題)」

「第四〇回大会」のご案内

新緑の候、皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、今年度の大会は、柳川以来十五年ぶりに九州地区で開催することにになりました。

このところ、山村での大会が続きましたので、久しぶりに「海で」というご要望におこたえして、牛深市で開催することにいたしました。牛深市は天草下島の最南端に位置し、「牛深三度行きや、三度ハダカ」と牛深ハイヤ節に唄われているごとく、活気にあふれた港町です。また、テレビドラマ「藍より青く」の舞台となった天草の海も、一度ご覧になる価値があるかと思えます。

多数のご参加をお待ちいたしております。

記

一、期日 平成四年十月二十九日(木)、三十日(金)

二、会場 牛深市総合センター

三、宿泊 ホテル金毘羅

注(1) 同封の返信用ハガキにてお申し込み下さい。なお、次回以降のご案内は参加希望の方のみに限定させていただきます。

(2) 前日の二十八日(水)の一八〇時、運営委員会が開催されます。

(3) 十月三十一日(土)、十一月一日(日)の両日、九州大学で、日本社会学会が開催されますので、村研大会の二日目は十五時で終了し、ただちに、福岡市の直行貸切バスを運行いたします。以上

事務局 米沢和彦、古賀倫嗣、蘭 信三

連絡先 〒八六二 熊本市健軍町水洗

熊本女子大学社会学研究室

TEL(〇九六)三八三一二九二九 ㊦三六二二

(文責 米沢)

村研年報編集委員会からの報告

第二八集の研究動向の執筆者が次のように決まりました。会員の最近の業績の抜刷りやコピーを次の方に至急に送ってくださるようお願い致します。

△研究動向▽

一 史学・経済史学

本間勝善

吉沢方

二 経済学・農業経済学

田畑 保

三 社会学・農村社会学

松岡昌則

四 外国研究

(韓国) 酒井俊二

(中国) 若林敬子

会員異動

△逝去△

小山 陽一 一九九二年一月十五日

〈退 会〉

内山 政照 一九九二年一月

小松 三郎 一九九二年

〈勤務先変更〉

菅野 正 宮城教育大↓仙台大学

〈新入会員〉

玉里恵美子 (龍谷大学社会学部大学院生)

岩瀬 祐一 (早稲田大学人間科学研究科)

〈住所不明〉

以下の会員の住所がわかりません。ご存じの方は事務局までお知らせください。佐藤直由 (山形大学)、谷田部武男 (東海女子大学)、渋谷長生 (弘前大学)

会員の出した本

高橋明善・蓮見音彦・山本英治編

『農村社会の変貌と農民意識』

(東京大学出版会、一九九二年、九四七六円)

故福武直会員が主宰して一九五三年に実施された秋田県農村と岡

山県農村の比較調査はつとに有名である。日本農村を「東北型農村」と「西南型農村」に類型分けし、それぞれに固有の社会構造類型が照応するという仮説が、それをもとに導かれたからである。その後、一九六八年、それらの農村について第二次の追跡調査が行われる。そしてさらに、一九八五年、第三次の追跡調査が行われた。本書は、その第三次追跡調査の報告である。今回は一次調査から一五年後と三二年後の農村の変化が見れることになる。

本書の分析で興味深いのは、六八年から八五年の一七七年間にはほとんど農民意識の変化が進んでいないことである。この後半一七七年は、前半一五年に比べると農村社会の変化は大きかった。全般的な農業の衰退や家族形態の変化、それにとりまう旧部落秩序の解体などがそれである。にもかかわらず、意識面については、前半一五年の変化は大きかったが、後半一七七年はほとんど変化がないか、あるいはむしろ前半の変化を逆戻りする傾向さえ見られる、という。たとえば単独相続を支持するものは、六八年でやや減少したものの、八五年には再び五三年当時と同じ割合に戻ったと指摘する。

三〇年以上離れた時点を比しようとするとき、調査項目の連続性を保つことがかむずかしくなる。意識調査にあつてはとくにそうである。著者たちはそこをあえて動かさず、連続性を確保しながら右のような貴重な結果をえた。しかし、著者たちは農家の階層と意識との関連が不透明になったことも、今回の分析結果として指摘している。農民意識をつかむにしても、もはや階層という三〇年来の枠ぐみではない現代農村の状況にそくした枠ぐみが必要なのであろう。もちろんそれは、本書に求めるべきものではなく、本書を通じて私たちが考えるべき問題である。

(秋津 元輝)